

追悼

名誉会員 松島義章博士を偲んで

樽 創



2019年の冬に撮影した松島義章博士（神奈川県立生命の星・地球博物館にて）。

日本古生物学会名誉会員，神奈川県立生命の星・地球博物館の名誉学芸員松島義章博士が2021年1月12日の朝，ご逝去されました。享年85（満84歳）でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

松島義章博士は1936年12月28日に長野県下伊那郡伍和村（現在の阿智村）に，松島八郎氏の三男として生まれ，高森町で育ちました（2人のお兄様は地質研究者の松島信幸博士と考古研究者の故神村透氏）。1955年に長野県立飯田高松高等学校を卒業，1960年に横浜国立大学学芸学部（地学科）を卒業され，横浜市の小学校に就職されました。その後，1964年に神奈川県青少年センターの技師（地学部門）として採用，1966年に博物館準備室に異動，そして1967年に神奈川県立博物館が開館することで学芸員としての仕事をスタートされました。1995年に県立博物館から自然系博物館として独立するかたちで神奈川県立生命の星・地球博物館が開館し，松島博士は1995年1月から同館の企画普及課長，1995年4月から学芸部長を務められ，そして1997年に退職されました。退職されてからも同館の名誉館員として活躍されてきました。また，1982年～92年まで奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに環境考古学課程の非常勤講師として，さらに横浜国立大学教育学部，静岡大学理学部，千葉大学理学部，国立歴史民俗博物館においても学生たちを指導してきました。

さて，松島さん（親しみを込めて以降松島さんと呼びます）は日頃から「学芸員は研究していないとダメだ」とよくおっしゃっていました。「いつも調べていないと調べることが億劫になってしまう」と，私が松島さんから何かを頼まれたときにはいつもかけられた言葉でした。また，松島さんに「君たちは仕事が遅い。君たちの仕事がスタートしないと，次の仕事がスタートできない。学芸員とはそのような仕事なんだから。」とよく言われました。もっともなことで，実際に松島さんの仕事は早く正確なものでした。これは松島さんのこれまでの博物館での仕事をみることでよくわかります。

松島さんの博士論文は「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集——特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷——」というタイトルで，神奈川県立博物館研究報告の自然科学15号（1984年）に掲載されています。これはいわゆる縄文海進を考古学分野の研究を含めた広い観点で科学的に調べた研究でした。日本全国にわたる縄文海進をこれだけ広く扱い，考古学など多分野にも影響を与えた研究はないと思います。松島さんの沖積層に関する博物館での論文は，神奈川県立博物館研究報告の第2号における「横浜市内沖積層の貝化石について」がスタートです。この論文の「はじめに」の中に「筆者は横浜付近に広く分布する洪積層研究のための基礎研究のひとつとして，特にこの地方の沖積層の研究をはじめた。」とあります。さらに「比較資料は量的には多くはないが沖積層の貝類化石群集は，現在の東京湾の貝遺骸群集と若干異なっていることが明らかとなった。」として，これから横浜の貝類を調べていくことが示唆されています。そして第4，5号では「大船貝層の ^{14}C 年代と貝化石群集」と「古大船湾の貝化石群集——その湾奥部について——」，第6号では「横浜市内の沖積層の貝化石群集（予報）」，第8，9号で「三浦半島葉山町の沖積層について」「三浦半島南部の沖積層」で南へ下り，第10号では「三浦半島の野比層から産出した貝殻の ^{14}C 年代」と ^{14}C 年代論へ移り，第11号になると「館山市西郷の平久里川における沼層の ^{14}C 年代」と東京湾を渡って千葉県へ行き，第12号になると「広島県海田の沖積層産貝化石の ^{14}C 年代」と大きく西日本に展開し，第13号では「北海道クッチャロ湖畔の海成沖積層の ^{14}C 年代とそれに関連する問題」と今度は北海道へ展開し，「三浦半島の葉山森戸川沖積層から産出した木片の ^{14}C 年代」は木片の ^{14}C 年代，第14号では「大阪河内平野の海成沖積層から産出した貝殻の ^{14}C 年代とそれに関連する問題」と関西に，そして第15号の「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集——特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷——」となります。こうして1969年～84年にかけて進めた研究を博士論文としてまとめ上げたのでした。

松島さんの凄いところは，1つはそのフットワークの

軽さです。北は北海道、南は鹿児島まで行き、そして車の免許証を持っていませんから、歩いて各地を廻ったそうです。また、車がないことで現地の研究者や学芸員に協力してもらい、彼らと密な関係を築きながらフィールドワークを進めていました。それにしても15年間で日本中を広く歩きまわっていた行動力には驚嘆します。このようにして、第四紀完新世の貝類の産出とその群集構成を調べていました。群集変遷を調べるためには、数多くの種と数多くの産地が揃わないとできないものです。そして、沖積層であるからこそ ^{14}C による年代測定が、より正確な年代論として使えるということを研究に取り入れたのも松島さんがパイオニアと言えるでしょう。1970年代に ^{14}C 年代測定法を用いていた自然系博物館の職員は、決して多くはないはずで

松島さんは、海外への調査もよく行かれたそうです。太平洋を中心に、1982、84、86年の第1次～第3次中部太平洋における海面変動とテクトニクス、また米倉伸之教授がいわゆるハイパック（HIPAC）と呼ばれる1988、89年の第1次～第2次太平洋とインド洋における海面変動の比較研究を、さらに太田陽子教授の第3次環太平洋地域における第四紀後期地震性地殻変動調査へ参加しました。また長谷川善和教授とアメリカへも新生代中・後期の脊椎動物化石調査で行きました。松島さんは英語が苦手だったようで、自身で自分のことを「俺は英語がダメだから」と言っていました。海外調査に7回出かけました。

松島さんが博士論文に掲載した縄文海進にともなう貝の温暖種と亜熱帯種の消長や時空分布を示した図ですが、 ^{14}C の年代値こそ最新研究と若干年代観が違っていますが、それ以外の種の消長や変遷の成果は現在でも色褪せるものではありません。松島さんがまとめられたデータは色々なところで役に立ち、松島さんに聞くと「おう、それだったら何年の研究報告に出ているよ」というように、取り扱ったデータは確実に出版するというスタンスは多くの後輩たちに影響を与えているものと思えます。そして松島さんは、神奈川県立博物館研究報告自然科学の第45号（2016年）まで執筆をしています。これは私の想像ですが、この様に研究報告をまとめた裏には、1つには「まだまだ、完新世の地層はやることあるんだ」ということと、研究報告が「この量では足りないので厚くしていこう」という私たち後輩への叱咤激励に違いありません。ただ、松島さんの仕事は、いわゆる化石（1万年より古い）ではない貝類を扱っていたため「その点が古生物学として弱いんだ」と言っておられました。恩師の鹿間時夫先生にはよく言われたそうです。しかし、今になって考えれば、沖積層の研究は私たちの生活や産業の場に近いものであり、建設や地震・津波防災にも松島さんが構築した沖積層研究が活用されていると言っても過言ではありません。

松島さんは博物館を退職された後も精力的に活動され、いつも新しいことを調べておられました。小田原市、鎌倉市といった神奈川県内だけでなく、北海道、鹿児島県、三陸海岸（岩手県）、佐渡島（新潟県：日本海）、五島列島（長崎県）、伊江島（沖縄県）など広く日本全国を廻っておられました。また、その間にも教科書となる「環境考古学ハンドブック（2006年）」「南九州における海成沖積層の貝化石（総特集 長岡信治教授（1）海から山、火山でのフィールドワーク）（2014年）」「小規模なおぼれ谷に残されていた縄文海進の記録（総特集 完新世海面変動）（2016）」などを執筆しています。特に「貝が語る縄文海進——南関東、 $+2^{\circ}\text{C}$ の世界——（2006年）」「貝が語る縄文海進：南関東、 $+2^{\circ}\text{C}$ の世界（増補版）（2009年）」は、自身の仕事を1冊の本としてまとめ上げたものです。

2019年の夏には、私は松島さんの故郷の阿智村に近い飯田市へ同行しました。「飯田に来るのも、これが最後だな」とおっしゃっていたのが印象に残ります。2泊3日の予定で飯田市美術博物館を訪れ、小泉明裕さんにアケボノゾウの象牙やキュウシュウサンバーの化石などをを見せていただき、また長谷川善和名誉教授のコレクションを案内していただきました。宿泊先では夕食時に松島さんが地元の同期の方4名と談笑される機会もありました。この出張の帰りにおいて、私は松島さんの口から初めて以下のことを聞きました。松島さんは若い頃、ちょうど博士を取った1985年前後、大学へ出たかったそうで、実際にある先生に頼んでみたことがあったようです。学生と一緒に日本列島各地の沖積層を廻り、もっと広くもっと多くの貝化石の情報を集め、さらには海外を研究してみたいと思ったのではないのでしょうか。今回の出張は松島さんの故郷に近かったということもあり、松島さんにとって感慨深いものだったと思われ、私にとっても出張中の松島さんとの会話は印象深いものになりました。

松島さんは2020年11月まで博物館にいらしており、資料のとりまとめなど研究を進めていました。その後、病氣療養やコロナ禍ということもあってお会いすることは出来ず、翌年1月のお別れの時にも立ち会えず、最後の言葉を交わすことが出来ませんでした。そのため、今だに「よう、元気か？」と後ろから声が聞こえてくる気がします。心よりご冥福をお祈り申し上げます。